

日本における社会教育の形成

—師範学校教科書にみる—

水垣 玲子

はじめに

平成16年3月29日に刊行された「今後の生涯学習の振興方策について(審議経過の報告)」の冒頭に『これまでの生涯学習振興施策の経緯と課題』として、生涯学習の考え方は、昭和40年(1965年)にユネスコの成人教育に関する会議において、ラングランによって提唱されたこと、昭和56年(1981年)に中央教育審議会の答申ではじめて本格的に生涯学習の考え方を取り上げたことが記されている。

SOA(聖徳大学オープンアカデミー)10周年記念誌にも平岡忠先生の同意味の文が載っている。

また放送大学の「生涯学習論—生涯学習社会の展望—」(岩永雅也著 2002)にも「ラングラン以前」として、明治維新以来、わが国では西欧型の学校体系が教育システムの中核を占めてきており、一旦成人してしまった後に何らかの定型的な学習機能を持つことが、極めて例外的にしか見られない事象であったこと、イギリスやアメリカとちがって社会的に必要とされず、戦前にはそのようなものはあまり見られなかった、と述べられている。

しかし、同じ「生涯学習論」の中に、「生涯教育」ということばが、ひじょうに広い領域をさすものとして用いられていること、「生涯教育」「生涯学習」の意義、そして「成人教育」と「社会教育」さらには「日本における社会教育の形成」ということで、体系化はされていないが原初的な成人教育の諸形態を近代以前の段階で見ることができること、19世紀前葉には石田梅巖門下の石門心学の講舎(塾)が日本の各地に百ヶ所以上も設けられ、成人に対して一種の実践的哲学を講じていたこと、あるいは、幕末期には成人を対象としたさまざまなレベルと内容の私塾が多数活動していたことも述べられている。

「生涯学習研究 1」(2003)で、私が「オルガンの生涯学習～その美しさとむつかしさ～」を発表した折に、小林虎五郎先生(前聖徳大学副学長・名誉教授)の「教育における成熟の概念」(「教育学と教育史学 乙竹岩造博士喜寿記念

論文集」1952)の論文に、1952年という早い時期に成人教育がアメリカにおいてめざましい発展を遂げていることを考察されている点に触れた。アメリカ合衆国における成人教育が200年あまりも前の部落集会にその起源を見いだすことができるとあるが、もちろんこれが成人教育を目指したものでなかったにせよ、ラングランの提唱が生涯教育のはじめであるかのような捉え方について少し疑問に感じていた。

その後、小林虎五郎先生に「生涯学習研究 1」や川並弘昭先生古稀記念論集「子どもと教育」(水垣玲子が書いた『日本庶民教育史』にみる寺子屋の教育に学ぶ)の中で小林先生のことを書かせていただいたので)をお届けしたところ、後日、乙竹岩造著「近世教育史」(師範学校教科書1937 培風館)を送ってくださった。その中で社会教育について述べた部分がたいへん多いのに驚いたことが、この文を書きたいと思ったきっかけである。

師範学校教科書「近世教育史」について

「子どもと教育」にも書いたことなのだが、「日本庶民教育史」を著した乙竹岩造(私の祖父)は、もう一つの大きな仕事として教科書の編纂があり、大正から昭和にかけての師範学校の教科書は概ね乙竹岩造の手に成ったものであった。就中昭和12年から昭和13年にかけて出版された「日本教育新教科書」(全13冊 培風館)は、教科書の大系として完成され、師範学校の7割がこれを使用したとされる。

小林先生が送ってくださったのは、「日本教育新教科書 近世教育史 文学博士 乙竹岩造著」(培風館)であり、「昭和13年1月24日師範学校教育科用 文部省検定済」とある。

目次によると

1. 本邦教育史研究の目的

2. 近世欧米教育の概要

文芸復興と教育、宗教改革と教育、実学主義の教育にはじまり、カント、ペスタロッチー、フレーベル、ヘルバルト、スペンサー等の教育思想・学説などに触れ、さらにライー、モイマン、デューイ、ナトルプ、コーン、ディルタイ、シュブランガー、リットの教育説へと書き進めている。

3. 本邦維新以前の教育の概要

太古・上古時代より、奈良、平安、鎌倉、室町、安土・桃山について述べた後、江戸時代の教育についてくわしく述べている中の一部に社会教育がある。

4. 本邦維新以降の教育

教育制度および施設の発達や、教育機関および方法の推移、そして総括である。

師範学校教科書「近世教育史」に見る日本の社会教育の形成

1. 太古・上古教育の概説

太古は、まだ外来文化の影響を受けず、純粹であり、自然素朴であって、宗教・道徳・教育等一切の文化が混沌として分化せず、教育の意識と行為とが分かれていなかった。教化の内容は、主として敬神・忠孝・武勇・清浄等であった。

儒教が伝来して、文字による教育がわが国にも起こった。儒教の中心思想は、仁と礼とであった。孔子は教育の力を信じ、子弟の素質・特性に応じて、その長所・力量を十分に発達せしめた。個性を尊重し、才能を伸ばしたとされる。儒教は長くわが国の教学を助けたと述べられている。

やがて仏教が伝来し、その厭世的・来世的な教理が、はじめは受け入れられなかったが、やがて次第に人心を支配するようになった。ことに仏教の伝来は、宗教のみならず、各種の学術・技芸も輸入して、わが国の文化に長足の進歩を促し、やがて仏教中心の文化を形成するに至った。

次の時代に入っては、儒教は特定の機関を通じて普及し、仏教は社会教化の一大勢力となったのである。

2. 奈良中心時代の教育

儒教・仏教の二教の文化を取捨して日本古来の精神を宣揚されたのは聖徳太子であり、17条憲法は、法制・教学を包括した訓令であった。聖徳太子は法隆学問所を起こされ、学資を与えて勉強をすすめ、留学生を隋に送るなど、教育の祖となった。大宝律令は、教化的色彩が強いが、世

界における最も古い教育令の一つである。大学と国学があり、その他に家学があった。家学とは、専門の学術技芸が特定の家に属し、その家系の人が世襲的にその学芸を以て世に立ち、朝廷にも仕えた。

ここで社会教化についても述べられている。

学校教育が主として儒教文化を内容として起こったのに対し、社会教化の事業も仏教文化の影響として盛んになった。聖武天皇の時に、諸国に国分寺を建てて教化を進め、施薬院および悲田院を設けた。これらは慈善事業・救済教育施設の走りであった。和気清麿の姉法均尼が孤児を集めて教育したのは世界最古の孤児院である。

当時の精神生活はずいぶん進んでおり、これは万葉集・日本書紀を見ても明らかであり、官吏のみならず民間でもある程度文字が使われたようである。

3. 平安時代の教育

大学・国学に加えて、新たに有力な公卿や僧侶によって建てられた私学が作られた。和気氏の弘文院、藤原氏の勸学院、菅原氏の文章院、橘氏の学館院、在原氏の奨学院、そして僧空海が創めた綜芸種智院などがあつた。綜芸種智院は、学科としては、仏教・儒教を併せて教え、教師は僧侶とともに俗人も教え、貴族・僧侶のほかには平民をも入学させた。すなわち庶民をも教育しようとしたものであつた。

平安時代で教育史上大切なこととして、片仮名・平仮名が考え出され、使い出されたことである。この結果、文化が発達し、教育が普及したことは明らかである。勝れた女性作家一紫式部・清少納言が出現した。

貴族上流の児童の学習は習字に始まり、習字はだいたい仮名から漢字にと進んだ。

ここに社会教育(奈良時代は社会教化)がはじめて登場する。「近世教育史」より引用する。

「特に挙ぐべきは図書館の発達である。既に前代の末ごろに石上宅嗣の芸亭があつて、好学の徒に公開せられたが、当代に入って有名なのは、菅原道真の紅梅殿である。規則も整つてゐて、図書館教育が行はれ、多くの秀才がここから出た。その他、大江匡房の千種文庫も名高く、数万巻の書を蔵してゐたと言はれる。」

冒頭にも書いた平成16年の「今後の生涯学習の振興方策について」の中にも「関係機関・団体等の活動の活性化の

ための方策に関する意見」として、

1. 社会教育施設 (1) 図書館

とあり、公民館等よりも先に図書館の充実・活用が重要であるとしている。いつの世でも、社会教育のための施設として図書館が考えられるというのは偶然の一致であろうか？

4. 鎌倉時代の教育

平安時代の末には公卿政治が衰えて武士の社会となった。武士は質実・簡易の風を尊び、主従互いに恩義を重んじ、死をも恐れなかった。文教は主として公卿と僧侶にゆだねられたが、公卿については家学の主なものが鎌倉に下り京都には優れた学者が少なくなったのに対し、僧侶の中には学者も多く帰化した禅僧もあり京都および鎌倉には好学者の案内所があった。学問をするために児童が寺に上る風習は前代からあったが、他に適当な初等教育機関が乏しかったから、どこでも寺院が児童の学問所となった。

金沢文庫は北条実時・顕時が造ったもので、和漢の珍籍を蔵し、江戸時代儒学再興に役立ったが、後に県立図書館となった。

仏教は、禅宗が武士の帰依を得た。女子教育も、平安時代が文学中心であったのに比して、健実有為な阿仏尼、松下禅尼、覚山尼など傑出した女性も出現した。鎌倉時代は文化の前面に健実味を加え、道徳的実践的な時代であったといえる。

5. 室町時代の教育

建武中興の前後、朱子学が採用された。

武士の社会的活動は貞永式目によって統制されていたが、彼らの教養に大きな関係をもったものは家訓である。家庭教育こそが当時の武士社会における力強い教育の方法であった。

文字教育の教科書としては往来物とお伽草紙があったが、社会教化として重要な役目を演じたものは、猿楽・謡曲・狂言であった。その他礼法・活花・茶湯・香道等も発達した。仏教の庶民化がますます強くなり、辻説法を行なう僧侶など、僧侶の手によって民衆に、技芸・医学・礼法などさまざまな道が伝えられた。

足利学校を上杉憲実が再興して多くの書籍を集めて教育も行なった。児童・少年が寺院で学ぶことがますます多くなり、このような児童・少年を寺子と呼んだ。通学するものも寄宿するものもあり、その教育は、読み書きの初歩のみでなく行儀作法をも学んだ。また寺院のみでなく、神官や武士がその家を開放し、全国の地方にも広がっていった。

その結果、地方の農民の中にも仮名の読めるものが相当にあったとされる。

家庭・社会の教育としては、名将や名臣の家訓が絶えず現れて子女教養に供せられ、乱世の世にもかかわらず家庭教育はかなり力強く行なわれた。特筆すべきは西洋文化の輸入であり、宣教師ザビエルはじめイエズス会の人たちが渡来し、これに伴って西洋の文化がわが国に入ってきた。彼らは、臼杵、天草、長崎、安土等に学校を建てて青年を教育したが、豊臣秀吉がキリスト教を禁じ、徳川家光が更にこれを厳禁した。当時多くの書籍(「イソップ物語」等)が彼らの手によってローマ字訳された。

6. 江戸時代の教育

教育史上、江戸時代はひじょうに重要な地位を持つのであるが、これは教化の恵みが広く平民に及び、古来文化が復活したので、わが国における文芸復興(ルネッサンス)の時代と言える。

この時代は封建制度であり、代表は武士ではあったが、武士も平民もともに平和と自由を享受していた。その結果、富が増加し文化の程度を高めたのである。

教育の進展を促したのは朝廷および幕府の奨学であった。この時代に入って印刷に活字が用いられ、和漢の書籍が次々と刊行された。家康は常に学問を尊重した。儒学を奨励し、武士にも学問をおろそかにしないようにいさめられた。

江戸時代初期は乱が多かったが、三代将軍家光の外交禁止以後静かになり、社会は順調に、文教も盛んになった。家光をはじめ自分の領内に学校を設ける大名も多く、実用的な述作が相次いで世に出た。これまでは、学といえば漢学を指し、教といえば儒教等を思ったが、このころは、わが国古来の文物・道義・歴史・故事等を研究する気運が興り、多くの書籍が出版された。また当時算盤も盛んに用いられるようになり、八代将軍吉宗は実学を興し、庶民の教育を奨励し、洋学(主として蘭学)を修めるものも生じた。

江戸時代の教育については、乙竹岩造がこれをもっとも得意とし、心血を注いで著した「日本庶民教育史」全3巻に詳しく書かれているのでこの教科書にもそれを整理してまとめてあり、主要な学派や学者、その業績が列挙してある。ここでは、それには触れず、本来の社会教育に進むこととする。

幕府直轄の学校として、昌平坂学問所などがあり、藩学(諸藩主が藩士を教育するために経営した学校)は幕末の教育史を飾るものであり、郷学(藩学と寺子屋の中間に位した)郷団(藩士・郷士等の子弟が集って文武の道を講じた

もの)学塾(学者が設立し、自ら教育に当たったもの)などがあった。

寺子屋は前代から各地に起こっていたが、江戸時代に入って平民庶民の勃興に伴ってめざましい発達普及を遂げた。(寺子屋については、川並弘昭先生古稀記念論集「こどもと教育」において少々触れた)

7. 江戸時代の社会教育

印刷文化の進歩は図書普及を来し、藩学・郷学・学塾・寺子屋等の発達と相まって、文書による一般教化を著しく有効とした。

江戸時代の上期から高札(幕府の禁令や訓戒、規定、非常災害時の心得などを目立つ場所に書いて示したもの)や施印(有益な文書の類を印刷して無料で希望者に頒布したもの)が現れていた。

武士社会にあつては訓戒・遺訓などが数多く現れているが、これらは武士社会のみに限られたものではなかった。

江戸時代は、経済力の発展とともに庶民の価値が認められ、彼らは形式上、町人・百姓として卑しめられながらも実質においては武士より下にあつたわけではない。その結果、当然のこととして社会教育が勃興して来た。就中、その影響が最も大きかったのみならず、今日においても活用せらるべき貴い意味と価値をもつものは、石田梅巖によって創められた石門心学と二宮尊徳によって起つた報徳教化とである。

この石田梅巖と石門心学については、冒頭にも述べたように、岩永雅也著「生涯学習論—生涯学習社会の展望—」の第8章 成人教育と社会教育 4. 日本における社会教育の形成の中の文を引用する。

「例えば、19世紀前葉には、石田梅巖門下の石門心学の講舎(塾)が日本の各地に百ヶ所以上も設けられ、成人に対して一種の実践的哲学を講じていたし、幕末期には成人を対象としたさまざまなレベルと内容の私塾が多数活動していた」

とあり、同書の注5(P83)にも詳しく載っている。

師範学校教科書であつた「近世教育史」の中の記述を少し取り上げてみる。

石田梅巖は、丹波国桑田郡東懸村に生まれ、23歳の時京都に出て、商家に奉公をしたが非常に学問が好きで、古の聖賢の行を学んで普く人の手本になりたいとの堅い志を抱き、修行を積んで、遂に一派の教を立てた。元來心学とは、宋・明の朱子学・陽明学を指した名であるが、心学教は梅巖の創めたものであるから、その門派の人々は特にこれを心門心学と称えて、他と区別した。

この心学を以て人を教化しようということは、梅巖の畢生の念願であつた。45歳の時、車屋町通の自宅に講席を開き「何月何日開講。銭は不要。御望みの方々は速慮なくお聞きください。」と提示して講釈をしたのが道話の始であり、これより門下生は皆これに倣つた。

石門心学の教育法は、門下生たちによって整備され、ますます隆盛になっていった。その教育方法の主なもの、

1. 道話 一般公衆に向かつて石門心学の趣旨に基づき、日常の道徳を分かり易く講釈するもの。一定の場所に多数の聴衆を集めて行つたものと、家庭に頼まれて家族・親族の集まりで行つたものがある。
2. 会輔 心学教の同人が知性見心の工夫を日常生活の上に実現する工夫のために集まって研究講習する会合
3. 静座 禪寺の座禪に似たもので修養の工夫を練る修業
4. 前訓 児童・少年のための訓話

直接指導を受けた門下生の後も、多くの優れた後継者を輩出させ、社会教化の上に甚大な効果をもたらした。享和・文化の頃には全国、約40の国に亘つて200に達する講舎を有し、その教化の範囲は60の国に及んだ。わが国の一大教化運動であり、一大精神運動であつた。

このように江戸時代において、社会教育が盛んに行われたのだが、この後、明治維新以降、学校での教育が中心となり、やがて、知育全盛、国家本位の教育から世界大戦へと、日本は、次第に余裕をなくし、軍国主義へと突進してしまつた。

「生涯学習論」を読み進むうちに「成人教育と社会教育」のところで「近世教育史」で読んだ覚えのある事項を見つけ、勉強してみたいと思つたのがこの文を書いたきっかけである。

もちろん現在のような生涯学習が国の指導もあつて系統的になつたのはラングラン以降である。しかし日本に全くそのかけらもなかつたかといへば、沢山の事例があるわけで、そのような問題点を提起したいと考へた次第である。

参考文献

- 1) 日本教育新教科書 近世教育史 乙竹岩造著 1937年 培風館
- 2) 生涯学習論—生涯学習社会の展望— 岩永雅也著 2002年 放送大学教育振興会
- 3) 生涯学習研究(聖徳大学生涯学習研究所紀要)1 2003年 聖徳大学生涯学習研究所
- 4) こどもと教育 川並弘昭先生古稀記念論集 2003年 聖徳大学出版会
- 5) SOA 10周年記念誌～SOAこれまでのあゆみ～ 2002年 聖徳大学
- 6) 今後の生涯学習の振興方策について 2004年 中央教育審議会生涯学習分科会